

2016 年度春期

計算機数学

(情報理工学科)

(担当：角皆)

本講義の概要

「計算」を対象とする数学

- 「計算」の定式化
- 「計算」の実現
- 「計算」の量と質

→ 「**計算する**」とは？

「計算する」とは？

「計算」

||

計算機で行なえること

では、計算機では何を行なっているのか？

計算機

- アナログ計算機
 - ★ 物理量
 - ★ 図式計算（計算図表・ノモグラム）
 - ★ 計算尺
- デジタル計算機
 - ★ 機械式
 - * 算盤
 - * 手回し計算機
 - ★ 電子式
 - * プログラム機構方式
 - * プログラム入力方式
 - * プログラム内蔵方式（von Neumann方式）
- 量子計算機

本講義の概要（予定）

- 「計算」の定式化
 - ★ 計算機のモデル化
有限オートマトン・Turing 機械など
 - ★ 計算機の扱う言語・文法
正規表現・生成文法・文脈自由言語など
 - ★ 計算可能性の理論
普遍 Turing 機械と対角線論法

本講義の概要（予定）

- 「計算」の量と質
 - ★ 計算量の理論
 - 多項式時間・“P vs NP” 問題など
 - ★ 幾つかの数理アルゴリズム
 - * Euclid の互除法
 - * 素数判定・素因数分解
 - * 並べ替え
 - * 冪の高速計算（繰返し二乗法） など

計算の理論

計算機に於ける「計算」の各ステップ
(= 命令の実行) は、

計算機内の記憶素子 (メモリ) の
現在の値 (状態) に従って、

その値を変更 (書込) すること

計算の理論

プログラム内蔵方式（von Neumann 型）では、プログラム・データを区別なくメモリ上に置くが、プログラムとデータとは、やはり本質的に違う

- プログラム：一つの問題では固定
- データ：可変な入力



どんな（有効な）データ（入力）が来ても、
所定の出力を返すことが要請される

計算の理論

或る問題の「計算が可能」



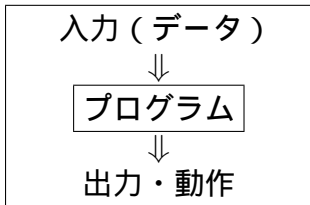
その計算を行なうプログラムが存在



計算機の機能 (= 「計算」のモデル) を決めて議論

→ 代表的な「計算のモデル」を幾つか紹介

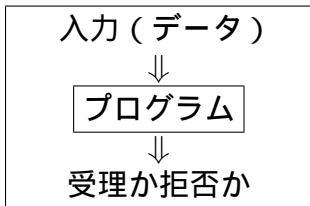
問題を「計算する」とは



原理・理論を考える際には、
出力は最も単純に「0 か 1 か」とする

- 0 : 拒否 (**reject**)
- 1 : 受理 (**accept**)

「問題」とは



解くべき「問題」：入力を受理する条件

「問題」の例

入力の範囲：文字 a, b から成る文字列

「問題」：入力を受理する条件

- a と b との個数が同じ
- a が幾つか続いた後に b が幾つか続いたもの
- a で始まり a, b が交互に並んで b で終わる
- 同じ文字列 2 回の繰返しから成る
- 回文 (palindrome)

などなど

「問題」とは

それぞれの「問題」に対し、
定められた計算モデルで、
受理 / 拒否判定が可能（問題が解ける）か？

受理される文字列が
「文法に適っている」文字列だと思えば、

「問題」とは「文法（言語）」である

「文法に適っている」かどうかの判定
… 「構文解析 (syntactic analysis)」

代表的な計算モデル

- 有限オートマトン（有限状態機械）
- プッシュダウンオートマトン
- チューリングマシン など

万能チューリングマシン

プログラム内蔵方式 (von Neumann 型)

… プログラムもデータとして保持

→ 一つの機械で様々な計算を柔軟に実現

同様の働きをするチューリングマシンが存在

… 万能チューリングマシン

(universal Turing machine)

全てのチューリングマシンの動作を模倣する

計算可能性の理論

チューリングマシンは、
どんな問題（言語）でも計算できるのか？

「計算できる」とは？

- **認識**する：
正しければ受理（そうでなければ受理しない）
- **判定**する：
正しければ受理、そうでなければ拒否

- 認識不可能な問題が存在する!!
- （認識可能だが）判定不可能な問題が存在する!!

計算量の理論

問題の難しさを如何に計るか？

→ (計算モデルを固定して)

解くのに掛かる資源の分量で計る
… 計算量 (**complexity**)

- **時間計算量** : 計算に掛かるステップ数 (手間)
- **空間計算量** : 計算に必要なメモリ量 (場所)

計算量の理論

計算量はアルゴリズム（計算方法）によって変わる
… アルゴリズムの計算量
→ アルゴリズムの効率 の評価

問題の計算量：

その問題を解くアルゴリズムの計算量の下限

最も効率良く解くと、どれ位で解けるか

= どうしてもどれ位必要か

= どれ位難しい問題か

→ 問題そのものの難しさ の評価

計算量の理論

入力データが大きくなれば計算量も増える

→ 入力データ長に対する増加のオーダーで表す
(Landau の O-記号)

多項式時間 $P \dots \exists k : O(n^k)$

“事実上計算可能な難しさ”

「しらみつぶし」が入ると

大体 $O(2^n)$ 程度以上になる (指数時間 EXP)

“事実上計算不可能”

計算量の例

- 加法 : $O(n)$
- 乗法 : $O(n^2)$ かと思いきや $O(n \log n \log \log n)$
(高速 Fourier 変換 (FFT))
- 互除法 : $O(n^3)$ (FFT で $O(n^2 \log n \log \log n)$)
- 素数判定 : 多項式時間 P
- 素因数分解 : 多項式時間 P かどうか判っていない

“非決定性” 計算量

あてずっぽうを許して、

うまくいけばどの位で解けるか
= 答を知って、その検証にどの位かかるか

非決定性多項式時間 (NP) :

非決定性の計算モデルで多項式時間で解ける

例 : 素因数分解は **NP**

… 素因数を知っていれば割算するだけ

未解決問題 (P vs NP Problem)

$$P = NP$$

であるか否か？

“The Millennium Problems”

の 7 つの問題のうちの 1 つ

参考 : The Millennium Problems

2000 年に Clay 数学研究所 (CMI) により
賞金 \$1M が懸けられた 7 つの問題

- Birch and Swinnerton-Dyer 予想
- Hodge 予想
- Navier-Stokes 方程式の解の存在と微分可能性
- P vs NP 予想
- Poincarè 予想 (Perelman により解決 (2003))
- Riemann 予想
- Yang-Mills 方程式と質量ギャップ問題